

日本人サクソ奏者 徳田雄一郎率いるレリーズディグは、ジャズの既成概念にとらわれず、且つジャズの伝統で満ち溢れた、エキサイティングな演奏を披露してくれた。

ライナップされたオリジナル曲達は、純血に進化したポストバップであった。

徳田の作曲、またピックアップされた日本の叙情歌には、

豊富なリズムックディヴァーシティと、心揺さ振るものがあった。

オープニングナンバー (High-Drive) は、

田村和太 (P) と鈴木直人 (G) の観衆を感動させるビッグバンプで始まった。

中林薫平 (B) のベースと、長谷川ガク (D) の激しいドラムは、徳田の激しく上昇し、決して止まる事の無い波の様なフレー징のフロウに、常に最高の刺激をもたらした。

徳田は、その瞬間瞬間にインスパイヤードされているように見え、

彼のアルトソロは、決して見せびらかす事無く、無駄のない筋肉質なソロであった。

スローナンバーでは鈴木 (G) がフィーチャーされた。ミズーリ州出身のギタリスト

パットメセニーをも凌ぐ、正確で高度なメロディックソロを展開した。

ジェントルなスイング曲【ブルネイ】は、また別の感情表現テクニックを魅せてくれた。

田村 (P) の感動的なソロを評すべきであろう。今までの緊張感と反して、

ゆったりとしたソロであった。

この感情的な曲の上で、クインテットと共に徐々緊張感を増していった。

印象的なエピソードを持つ “Nothing There” 。速いウォーキングベースの上で、

徳田と鈴木との切り裂くような強烈なユニゾンラインを展開。

徳田のアルトは自由に力強く疾走し、リズムセクションは彼の飛躍する

イマジネーションに注意を払い、共に躍動していた。

終盤、サクソとギターのエンドイングメロディーの前に、ドラムとピアノがソロを展開し、

この素晴らしい楽曲を締めくくった。

“Song of the seashore (浜辺の歌)” を紹介しよう。 徳田は観客に伝えた、

“津波は全てをのみ込みました。しかし、私達は今も海を愛しています。

私達には海が必要です。”

穏やかなワルツを奏でる徳田の歌声はエモーショナルに満ち溢れ、言語の違いなどを超え、

聴衆に強く訴えかけた。

奇妙であった。大きな被害をもたらした直後だというのに、

この儂くも美しい海を歌った叙情歌は心に響いた。

中盤での徳田のソロは、優しく、全てを許すようであった。

レリーズディグのパフォーマンスの最中、終始歓声が響き渡っていた。

そして最後に、とてつもなく大きな喝采を観衆から浴びていた。

ボルネオジャズの観衆の評価は嘘偽りの無いものである事を記す。

ストレイトアヘッドジャズ。